

博士論文予備審査の結果の要旨

審査対象者：船守 美穂 氏

審査委員：主査 関村 直人教授（原子力国際専攻）

：副査 高橋 浩之教授（総合研究機構）

：副査 越塚 誠一教授（システム創成学専攻）

：副査 村上 健太准教授（レジリエンス工学研究センター）

：副査 福留 東士教授（教育学研究科）

実施日と場所：2023年10月18日10:00~12:00、工8号館222中会議室にて実施

論文題目（和）：21世紀高等教育の現代的課題と方向性 - 大学運営主体のための羅針盤

（英）：The issues and future directions of higher education in the 21st century
- A navigation chart for university administrators

本論文は、グローバル社会における高等教育・学術の動向を分析して、21世紀高等教育が直面する現代的課題、高等教育機関の変革の変遷、近未来の高等教育・学術のあり方について分析を行った結果に基づいて、大学の在り方を変革する必要性が生じていることを俯瞰的に示しており、大学運営主体に対して留意すべき観点を提言している。またデジタル化とデジタルトランスフォーメーション（DX）の作用を分析して、大学の未来像形成における役割について考察している。

論文はⅣ部構成で全8章からなっている。序章は本研究の問題設定とアプローチについて述べており、250以上の教育関連ニュースから高等教育の現代的課題となる論点を抽出し、それらに対して背景、外部環境、アクター、現代的課題の主要トピックスをタグ付けし、遷移のフェーズに応じて整理して、21世紀高等教育の現代的課題の俯瞰図をとりまとめている。これに基づき第1章では、10項目からなる課題にブレークダウンがなされ、多様性や社会課題解決などの新たな動きに対応した高等教育・学術の未来像に関する広範な問題を本研究の対象としていることを議論している。

第Ⅱ部は第2～4章よりなり、分析対象としたデータの範囲を検討して本研究の分析手法の有効性を議論するとともに、21世紀高等教育の新たなパラダイムの方向性を①多様性を前提とした高等教育システムの再構築、②社会に通用する高等教育の構築、③オープン性とデジタル技術の可能性の模索、④社会人等これまで高等教育に関わらなかった層の受け入れ、⑤競争パラダイムから協調パラダイムへの転換の5項目に整理しうることを示している。またデジタル化とDXの作用を分析し、高等教育・学術とは本来独立した事象であったデジタル化が人々の協働を可能とし、高等教育・学術の新たなパラダイムに要求される条件を満たしうることを議論している。

第Ⅲ部は第5及び6章からなり、社会に繋がる教育研究活動が一層求められるようになっている大学において、継続的な問題解決のための活動を進めるために、第Ⅱ部で示した新たなパラダイムを踏まえ大学運営主体への提言を取りまとめている。特に高等教育のマス化及びユニバーサル化から時差を持って現れる「研究のマス化」に関する新たな概念が提示されており、学際性を超え多様化する研究者像を包含する大学と社会の連携のための環境整備等を含む位置づけの明確化と実施体制の強化策が示されている。

第Ⅳ部の第7章は本研究の結論であって、近未来の大学における高等教育のアンバンドリングの可能性についてとりまとめを行っている。高等教育と学術研究の双方におけるアンバンドリングとリバンドリングにおいて守るべき価値を示すとともに、専門職人材によるオープンな学習コミュニティ、デジタル化とDXがもたらす可能性、地域連携の価値等を例示して、高等教育と学術が創出すべき価値についてとりまとめがなされている。

予備審査においては、本論文で採用した研究手法の有効性と背景知識の共有化について議論がなされた。研究のオリジナリティとなる研究のマス化とアンバンドリングについて質疑応答がなされた。さらに大学における社会連携講座についても検討を加える意義が議論された。

以上から、本論文を新規性、有用性、学術的価値および進捗度の観点から審査した結果、予備審査として合格と認められる。